

I Samuel 12:15-25, 13:1-23

(Iサムエル記12:15)『もし、あなたがたが【主】の御声に聞き従わず、【主】の命令に逆らうなら、【主】の手があなたがたの先祖たちに下ったように、あなたがたの上にも下る。』

サムエルはありのままを語っています。もし、民が神さまに仕えるなら、神さまは彼らを祝福されます。もし彼らが神さまに仕えないなら、さばきが来るのです。

今、神さまはこのことに、ドラマチックで奇蹟的な方法で応答されます。

(Iサムエル記12:16-18)『今一度立って、【主】があなたがたの目の前で行われるこの大きなみわざを見なさい。今は小麦の刈り入れ時ではないか。だが私が【主】に呼び求めると、主は雷と雨とを下される。あなたがたは王を求めて、【主】のみこころを大いにそこなったことを悟り、心に留めなさい。』それからサムエルは【主】に呼び求めた。すると、【主】はその日、雷と雨とを下された。民はみな、【主】とサムエルを非常に恐れた。」

「嵐のように説教する」ことができたのは、エリヤが最初ではなかったということです。エリヤは雷雨の嵐を呼びましたが、サムエルはエリヤ以前に同じことをしました。そしてこれは、私が思うに、サムエルの生涯の上に押された神さまの印章です。雷と雨とは、神さまのスポークスマンとしてのサムエルのキャリアに対する、大きなアーメン(同意)でした。

(Iサムエル12:19)「民はみな、サムエルに言った。『あなたのしもべどものために、あなたの神、【主】に祈り、私たちが死なないようにしてください。私たちのあらゆる罪の上に、王を求めるという悪を加えたからです。』」

この人々にとって、王を求めることは罪でした。彼らは、他の国々のように自分たちを治める王を欲しがることによって、神さまを拒否していたのです。

(Iサムエル12:20)「サムエルは民に言った。『恐れてはならない。あなたがたは、このすべての悪を行った。しかし【主】に従い、わきにそれず、心を尽くして【主】に仕えなさい。』」

過去の罪や間違いによって、自分の人生をだめにしてしまうようなことはしないでください。あなたがどんな人であるか、過去に何をしたかに関わらず、もし救いと赦しを求めて主に立ち返るなら、神さまは受け入れ、豊かにあなたを祝福して下さいます。過去に、将来を破壊させたり、現在をだめにさせたりしてはなりません。あなたがクリスチャンなら、神さまのためにそこから進み出てください。

(Iサムエル記12:21)「役にも立たず、救い出すこともできないむなしいものに従って、わきへそれてはならない。それはむなしいものだ。」

主だけにしっかりとつかまってください。小細工は放っておきましょう。今日、教会は‘方式(メソッド methods)’を試しています。教会は、神さまだけが祝福することのできる方だということに気づいていないようです。私たちは、主と主のみことばにしっかりとつかまらなければならないのです。聖書を弁護する必要はないと思います。必要なのは、聖書を説明することです。聖書を宣べ伝えることです。私たちに必要なのは、疑問符よりも、感嘆符と断言のしるしなのです。

(Iサムエル記12:22)『まことに【主】は、ご自分の偉大な御名のために、ご自分の民を捨て去らない。【主】はあえて、あなたがたをご自分の民とされるからだ。』

これは栄光に満ちた節です。あなたはもうイエスさまを受け入れましたか？主はあなたの救い主ですか？あなたは主に憩っていますか？主はあなたをお捨てになることはありません。主は、ヘブル人への手紙の著者を通して次のように言われています。

(ヘブル13:5)「金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。『わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。』」

私たちの神さまは何とすばらしいことでしょう！神さまは私たちたちをご自分の民とされることを喜んでおられるのです。

なぜ神さまはイスラエルの民を選ばれたのでしょうか？その答えを探るとき、民族をではなく、神さまを見てください。神さまがそうされたのです。それで十分です。おそらく、神さまがあなたを選ばれて、あなたの友人たちの中にはなぜだろうと思っている人もいるかもしれません。大切なことは、神さまが私たちを選ばれたということです。理由はそれで十分です。そのことを神さまに感謝しましょう。神さまは私の前を通り過ぎてしまわれることもできたはずですが、私は神さまがそうされなかったという事実を心から喜んでいます。サムエルがイスラエル人たちに語っているメッセージはすごいメッセージです！あなたは、ご自分が主の側にいることができ、嬉しいと思いませんか？主と友達であることはすばらしいと思いませんか？主が自分の救い主であることはすごいと思いませんか？主はあなたの味方です。あなたに反対してはおられません。主はあなたを助けたいと思っておられます。主は、救い主であられるのと同時に、力強い助け主です。主は、完全に救われるのです。

(Iサムエル12:23)「『私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて【主】に罪を犯すことなど、とてもできない。私はあなたがたに、よい正しい道を教えよう。』」

私は、このラジオミニストリーで、多くの人たちが賜物を持っておられることを発見しました。それは、祈りの賜物であり、神さまから来るものであると私は信じています。南カリフォルニアには、幾人か病氣と痛みのところについておられる方々がいます。その中のある人たちは寝たきりです。彼らは、祈りのミニストリーをしています。彼らの祈りは、何ものにも代えられません。私には彼らの祈りが必要なのです。

今は私は退職して、以前よりも国中に出かけていく機会があります。私は今日、もっともすばらしいミニストリーを楽しんでいます、そのすばらしさはかなりの割合で、神さまの民の祈りにかかっています。たとえば、シカゴではある男性が私と握手して、言いました。

「私はあなたのために長年祈ってきたんですよ。」

このようなことを聞くと、私は涙して主の御前にひざまずきたいと感ずります。ほかの人のために祈るのは、特権です。

サムエルは言いました。

「私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて【主】に罪を犯すことなど、とてもできない。」

私たちひとりひとりには、祈りの責任があります。私は、アメリカのあるグループの牧師たちのために、祈る必要を感じています。その多くは私の友人です。私は彼らの教会に出たことがあって、彼らの問題についていくらか知っています。私は定期的に彼らのために祈っています。また私には、自分の家族のために祈る責任もあります。もし私が家族のために祈らなければ、誰が祈る言うのでしょうか？私には、ラジオミニストリーのために祈る責任もあります。クリスチャンなら、あなたもまた責任があります。私たちはお互いに祈りあうべきです。多くの貧しい人たちがいます。私たちもまた、お互いのために祈るのをやめて【主】に罪を犯すことなど、とてもできません。

(Iサムエル記12:24-25)「『ただ、【主】を恐れ、心を尽くし、誠意をもって主に仕えなさい。主がどれほど偉大なことをあなたがたになさったかを見分けなさい。あなたがたが悪を重ねるなら、あなたがたも、あなたがたの王も滅ぼし尽くされる。』」

前にフットボールの試合を見に行ったのは、カリフォルニア州パサデナのローズ・ボウルでした。ずいぶん前のことです。私は、反対側のチームを応援している人の隣に座りました。彼は変人でしたね。自分が応援しているチームが3センチでも前に進むと、彼は飛び上がるのです。まるで、ヒステリーの発作でも起こしているかのようでした。いやはや、彼はずっとそれ続けました。私は彼とは反対のチームを応援していましたから、彼の行動は私をいらいらさせました。でも、彼を見ていて、神さまのことについて、彼ほどの熱心さが私にもあったらなあ、と願わずにはいられませんでした。私たちは、全身全霊をもって神さまに仕える必要があります！

この、預言者サムエルの最後のことは、あなたや私に対するすばらしいメッセージです。

13章

テーマ: 神さまに対するサウルの反抗。

サウルの本当の性質が明らかになり始めます。サウルの息子ヨナタンがミクマスで勝利を得ますが、サウルが角笛を吹いて、その手柄を横取りします。うぬぼれて、サウルは祭司の役職を侵害します。サムエルはサウルを叱責し、彼を拒否します。イスラエルが無防備であることが明らかになります。

この章では、サウル王に関して9章で提示した論題を確認することができるとおもいます。サウルはうわべでは王のように見えてましたが、その下では彼は全く王ではありませんでした。彼は紙人形の王にしか過ぎなかったのです。

(Iサムエル記13:1-4)「サウルは三十歳で王となり、十二年間イスラエルの王であった。サウルはイスラエルから三千人を選んだ。二千人はサウルとともにミクマスとベテルの山地におり、千人はヨナタンとともにベニヤミンのギブアにいた。残りの民は、それぞれ自分の天幕に帰した。ヨナタンはゲバにいたペリシテ人の守備隊長を打ち殺した。ペリシテ人はこれを聞いた。サウルは国中に角笛を吹き鳴らし、『ヘブル人よ。聞け』と言わせた。イスラエル人はみな、サウルがペリシテ人の守備隊長を打ち、イスラエルがペリシテ人の恨みを買った、ということを知った。こうして民はギルガルのサウルのもとに集合した。」

サウルの本当の性格が出始めています。良く見ると、サウルはいかさまだということが分かってきます。この箇所では、ヨナタンが「ペリシテ人の守備隊長を打ち殺した」と書かれています。勝利の手柄は誰のものになったでしょう？サウルです。ヨナタンは、能力のある軍事リーダーのようです。あとになって、ヨナタンはとても面白い作戦を使ってもうひとつの大きな勝利を収めます。でも、特にこの戦いでは、戦ったのはヨナタンなのに、角笛を吹いたのは(訳注:blew the trumpet で「角笛を吹く」という文字通りの意味と、「自慢話をする／自画自賛する」という意味があります)サウルでした。勝利の手柄を取ったのはサウルでした。サウルは、次のようなモットーを信じていました。

「自分の角笛を吹き鳴らさない者は、角笛がならなかったのだ、と言う。」(訳注:「自分で手柄を吹聴しなければ、誰が認めてくれるだろう」というような意味でしょうか?)

サウルは自分の角笛を吹き鳴らしました。彼は闘いに勝った手柄を、自分の息子から取り上げたのです。彼はイスラエルを集め、国中にいかさまの報告をしました。軍隊も、ヨナタンに従っている者たちも、サウルの報告が真実でないことを知っていました。人々は、サウルの軍隊には弱みがあり、それが彼のアキレス腱ではないかと疑い始めます。彼は謙遜でしょうか？最初、サウルは謙遜なふりをしたとていましたが、この事実が今、明るみに出ようとしています。

(Iサムエル記13:5-6)「ペリシテ人もイスラエル人と戦うために集まった。戦車三万、騎兵六千、それに海辺の砂のように多い民であった。彼らは上って来て、ベテ・アベン・エゼル山の東、ミクマスに陣を敷いた。イスラエルの人々は、民がひどく圧迫されて、自分たちが危険なのを見た。そこで、ほら穴や、奥まった所、岩間、地下室、水ための中に隠れた。」

明らかに、ペリシテ人たちは敗北からもち直し、力をもってイスラエル人たちに対抗して出て来ました。

(Iサムエル記13:8-9)「サウルは、サムエルが定めた日によって、七日間待ったが、サムエルはギルガルに來なかつた。それで民は彼から離れて散って行こうとした。そこでサウルは、『全焼のいけにえと和解のいけにえを私のところに持って來なさい』と言つた。こうして彼は全焼のいけにえをささげた。」

ここに、サウルに関するもうひとつのことが明らかになっています。彼はおこがましくも、自分の王としての地位のゆえに、自分が全焼のいけにえをささげることができると考えました。あとになってまた、自分が祭司の務めを果たすことができると考えた、ウジヤというもうひとりの王が出てきます。神さまはウジヤを厳しくさばられました。彼はツアラアトに冒されました。(II歴代誌26章参照)サウルは、レビ族出身の祭司だけしか全焼のいけにえをささげることにはできないという神さまの明白な指示を無視したのです。

(Iサムエル記13:10-11)「ちょうど彼が全焼のいけにえをささげ終わったとき、サムエルがやって来た。サウルは彼を迎えに出てあいさつした。サムエルは言った。『あなたは、なんということをしたのか。』サウルは答えた。『民が私から離れ去って行こうとし、また、あなたも定められた日にお見えにならず、ペリシテ人がミクマスに集まったのを見たからです。』」

サウルはサムエルを待とうとはしませんでした。彼はせっかちで、うぬぼれていました。彼は、自分にはサムエルが現れるのを待たなくて良い理由が三つあると考えました。

- (1) 人々が離れ去って行こうとしたこと。
- (2) ペリシテ人たちが彼に対抗して出て来たこと。
- (3) サムエルが着くのが少し遅れたからということ。

もちろん彼は、勝手な理由をつけて自分の行動を合理化していたのです。彼は自分以外のすべての物とすべての人のせいにしていました。

(Iサムエル13:12)「『今にもペリシテ人がギルガルの私のところの下って来ようとしているのに、私は、まだ主に嘆願していないと考え、思い切って全焼のいけにえをささげたのです。』」

サウルは「思い切って」いけにえをささげ、主に嘆願をしたというわけです。彼はうそをついていたと言っておきましょう。彼は敬虔なふりをしています。本物のサウルが現れてきているのです。

(Iサムエル記13:13-14)「サムエルはサウルに言った。『あなたは愚かなことをしたものだ。あなたの神、【主】が命じた命令を守らなかった。【主】は今、イスラエルにあなたの王国を永遠に確立されたであろうに。今は、あなたの王国は立たない。【主】はご自分の心にかなう人を求め、【主】はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。あなたが、【主】の命じられたことを守らなかったからだ。』」

サウルは最初に、もし彼が神さまに従うなら彼は祝福され、もし従わないなら、さばきが来るよと言われたのです。支配者は、主に従わなければなりません。そして今日この世界が必要としているのは、主に支配された支配者です。私たちの問題は、私たちにそのような支配者がいないことから生じてくるのです。もちろん、主イエスが地上に戻って来られるまで、私たちにはそのような支配者が与えられることはありません。そのような支配者をお与えになることが、この地上に対する神さまの最終的なゴールなのです。サウルは従いませんでしたから、神さまはもうひとりの人物を王としてお立てになります。神さまはその人物をちょっとあとになって登場させられます。サムエルでさえも、この時点ではその人が誰なのだか知りません。

(Iサムエル記13:15-17)「こうしてサムエルは立って、ギルガルからベニヤミンのギブアへ上って行った。サウルが彼とともにいる民を数えると、おおよそ六百人であった。サウルと、その子ヨナタン、および彼らとともにいた民は、ベニヤミンのゲバにとどまった。ペリシテ人はミクマスに陣を敷いていた。ペリシテ人の陣営から、三つの組に分かれて略奪隊が出て来た。一つの組はオフラへの道をとってシュアルの地に向かい、」戦いがまさに始まろうとしています。ここで私たちは、無防備の本当の危険さを見ます。

今日、アメリカを無防備にしようとしている人たちがいます。彼らは、もしすべての武器を破壊すれば、どうにかして戦争がなくなると信じています。ほかの人々は、もし銃刀法が通って、正直な人たちが武装をなくせば、悪い奴らを止めることになるかと信じています。悪い奴らを無防備にすることはできません。正直な人たちが、不法な者たちによる侵害の前に、無防備で置かれるだけのことです。これは、理想主義的な、愚かな考え方です。

(Iサムエル記13:19-21)「イスラエルの地のどこにも鍛冶屋がいなかった。ヘブル人が剣や槍を作るといけないから、とペリシテ人が言っていたからである。それでイスラエルはみな、鋤や、くわや、斧や、かまをとぐために、ペリシテ人のところへ下って行っていた。鋤や、くわや、三又のほこや、斧や、突き棒を直すのに、その料金は一ピームであった。」

ペリシテ人たちは、イスラエル人たちを無防備にさせていました。でも、イスラエル人たちは畑の道具を持つことは許されていました。でも、その道具をとぐためには、彼らはペリシテ人のところにくだっていかなければ

なりません。このようにして、敵たちはイスラエル人たちが武器として何を持っているかを正確に把握できたのです。

(Iサムエル記13:22－23)「戦いの日に、サウルやヨナタンといっしょにいた民のうちだれの手にも、剣や槍が見あたらなかった。ただサウルとその子ヨナタンだけが持っていた。ペリシテ人の先陣はミクマスの渡しに出た。」

サウルとヨナタンのふたりだけが剣をもっていました。軍隊のほかの人々は、つるはしや斧や棍棒やそれに近い道具をもっていたのだと思います。サウルの軍隊は、戦うためにこんな武器しかもっていなかったのです！